

# 国木田独歩

## 「春の鳥」鑑賞

MY APPRECIATION ON "A BIRD IN SPRING" written by Doppo KUNIKIDA

中野恵海

はしがき

芥川竜之介がその小説「河童」(昭和二・二・十一)の中で、河童の国の長老が主人公の青年とラップという河童の学生に、籠がんの中にある大理石の半身像を次々に見せて、簡単な説明を加える場面がある。第一番目がストリンドベリイ(スエーデンの作家)で次はニイチェ(ドイツの哲学者)、そしてトルストイ(ロシアの作家)と続いて、四番目が国木田独歩、五番目がワグネル(ドイツの歌劇作曲家)、そして六番目がゴッガン(フランスの画家)、で説明が終っている。独歩について長老はこう述べる

——これは国木田独歩です。驟死れきしする人足じんそくの心もちをはつきり知つてゐた詩人です。

この芥川好みの六人の人物の中に独歩を加え、そして晩年の短篇「窮死」(明治・四〇)を思わせるような「驟死する人足の心もちを

国木田独歩「春の鳥」鑑賞

はつきり知つてゐた詩人」と呼んだところに独歩への愛情と理解とその評価がうかがえるように思われる。芥川には更に最晩年の評論集「文芸的な、余りに文芸的な」(昭二・二・七)があり、その二十八章は「国木田独歩」と題され、次の様な文章がある。

——独歩は鋭い頭脳を持つてゐた。同時に又柔かい心臓を持つてゐた。しかもそれ等は独歩の中に不幸にも調和を失つてゐた。(略)

——しかし更に独歩を見れば、彼は鋭い頭脳の為に地上を見ずにはゐられないながら、やはり柔かい心臓の為に地上を見ずにもゐられなかつた。前者は彼の作品の中に「正直者」、「竹の木戸」等の短篇を生じ、後者は「非凡なる凡人」、「少年の悲哀」、「画の悲しみ」等の短篇を生じた。自然主義も人道主義者も独歩を愛したのには偶然ではない。(略)

——独歩は地上に足をおろした。それから——あらゆる人々のやうに野蠻な人生と向ひ合つた。しかし彼の中の詩人はいつまでたつても詩人だつた。(略)

——自然主義の作家たちは皆精進して歩いて行つた。が唯一人独歩だけは時々空中へ舞ひ上つてゐる。……

引用が少し多くなつたが、そして芥川の文章は例によってひどく文学的ではあるが、独歩という作家の本質には二面があり、彼の表現によれば、鋭い頭脳と柔かい心臓、つまり自然主義的な面と、詩人的な面とが併存している事を繰り返し述べている。

本稿で取り上げた小説「春の鳥」(明治・三十七・三)は普通の分け方にしたがえば、製作は彼の中期に当り、理想と現実、運命と個性を対照的にえがこうとした時期だと云われている。そして芥川によれば、彼の「柔かい心臓」の所産たる「少年の悲哀」などの系列に属するように思われる。本稿で私は、「春の鳥」を鑑賞しつつ、独歩が文学史的に、単に自然主義文学者、或は自然主義文学の先駆者なりと、簡単に片付けられる事に抗議しようという気持を持ちつづけた。そして彼が如何に本質的には知的ロマンチストであつたかという事を、平凡に主張しようとした。

## 第一章

——今より六七年前、私は或地方に英語と数学の教師を為て居たことが御座います。

これがこの小説の書き出しである。或地方とは勿論、大分県の豊後佐伯町のこと、彼がその鶴谷学館で開講したのは、明治二十六年(一八九三)十月四日独歩二十三才の時であつた。それより六七年後

の執筆であるとすれば、この作は明治三十二、三年頃に書かれた事になるが、実際「女学世界」に発表されたのは明治三十七年三月であつた。「子が作品と事実」(明治四〇・文章世界)にも、このモデルとなつた少年との事があつてから「此一篇が、七・八年の後に出来たのである」と述べ、執筆時に対する作者独歩の記憶はほぼ一致している。このあと、独歩を思わせる「先生」なる人物が、或日曜の午後、城山と呼ばれている古い城址のある山に登る。そして「持つて来た書籍を読んで居る」とある、この書籍とは、何かワイーズワースの詩集を思わせる書きぶりである。「欺かざるの記」の明治二十六年十月五日の記に、

——雨降ること蕭々たり昨日より始めて授業す、三時半(午後)より下級生の為めにナショナル読本二の巻を授く四時半よりリーディングを授く、午後八時半より代数学を授く、九時半より上級生の為めにスキントン萬国史を講ず、以て日課を了はる。

とある。授業は午後三時半から五時半、午後八時半から十時半の二部教授で、一週二十三、四時の担当、代数学はチャーレー・スミスチャーレー・スミスの訳書を用いたという。ほかに万国史を原書でやつたというから、授業は英語と数学だけではなかつたらしい。

ここで「先生」は十一、二才かと思われる一人の白痴の児童こどもに会い、「先生、何を為して居るの?」と声をかけられる。その児の名前を聞くに「六」と答える。そして「烏々」と叫びながら天主台を駆け下りて往つてしまふ。

第一章は、主人公の紹介である。如何にも短篇小説らしく、簡潔に

主人公を紹介し、いきなり物語の中に読者を連れ込む手法である。

## 第二章

——私は其頃下宿くだじやまどでしたが何分不自由で困りますから色々人に頼んで、遂に田口といふ人の二階二間を借り、衣食一切のことを任すことにしました。

第二章冒頭の文章であるが、下宿住しながら「何分不自由で困」というのは何に一番困るのであるか、など今日の若い人達には理解し難いようである。明治二十六年という時代のことである。この時代の男性にとって、着物や足袋という様なものの綻びほころびを直すとか、これを洗濯するという様な事は大変に困る事であったのである。

その田口の家に移った日の翌朝、散歩に出ようとした先生が城山で逢った児童が庭を掃いているのを見る。

——「六さん、お早う」と声をかけましたが、児童は私の顔を見てニヤリ笑つたまま、草箒くさほうきで落葉を掃き、言葉を出しませんでした。

城山では児童の方から「先生、何を為て居るの」、と声をかけたのに、面識が出来た今、六さんと名前まで呼ばれているのにニヤリ笑うだけである、というのはどういう事か。

これは、この白痴の少年は、城山という自然の懐にいる時はそれこそ自然の児として生々とし、のびのびと積極的に動くのであるが、ひとたび人間社会に置かれた時は、知能の低劣な欠陥人間として、常に

卑生まれ、貶さげすまれ、痛めつけられる事から、怯え、恐れ、消極的にならざるを得ない、その姿を描いているものと思われる。

「先生」は田口の主人からこの白痴の児童に幾分の教育を加える事は出来ないものかと相談を受けるが、容易に受け合う事が出来ない。然し其の後だんだんその様子を見ると気の毒でならなくなる。

——不具の中にもこれほど哀れなものはないと思ひました。啞、聾ろう言などは不幸には相違ありません。言ふ能はざるもの、聞く能はざる者、見る能はざる者も、尚ほ思ふことは出来ます。思ふて感ずることは出来ます。白痴となると、心の啞、聾、盲やくらですから殆んど禽獸に類して居るのです。

「殆んど禽獸に類して居るのです」というこの進むような歎きの声は、この作品の動機どうき(MOTIF)たるものである。モチーフは普通、その作品の表面に剝出しに出て来るものではなく、この様な例は珍らしい。「先生」は更に、その後の夜、児童の母親から、その教育の依頼を受ける。

ここで第二章は終るが、第一章に顔を出した本篇主人公、白痴の少年のその周辺と、この少年の痛ましさに心うたれてゆく過程が描かれ、この作品が書かれたモチーフが露あらわになる。

## 第三章

この母親とても白痴に近いのに、我子の白痴を心配することが普通の親と少しも変らない事に心動かされた「先生」は散歩ごとに六蔵を

伴うことにして、数の観念を植え付けようと努力するが全く効果が挙がらない。この六蔵はなかなかの腕白者であるが、又直きに泣く。泣きはするが又直ぐと忘れている。こんな有様であるから、この六蔵が歌など知っている筈もなさそうであるが、知っている。木拾いの歌うような俗歌を覚えていて、おりおり独りでやっているのである。

——或日私は一人で城山に登りました。六蔵を伴れてと思ひました。が姿が見えなかつたのです。冬ながら九州は暖国ゆゑ天気さへ佳ければ極く暖かで、空気は澄んで居るし、山のぼりには却て冬が可いのです。

改まったような情景描写であるが、この九州暖国の冬の城山を背景として本篇主人公の白痴の少年が描かれる。文章はつづく。

——落葉を踏んで、頂に達し例の天主台の下までゆくと、寂々として満山声なき中に、何者か優しい声で歌ふのが聞えます、見ると天主台の石垣の角に六蔵が馬乗りに跨がつて、両足をふらふら動かしながら、眼を遠く放つて俗歌を歌つて居るのでした。

ここに描かれた少年の姿は殆んど完璧で、独歩文学の精髓を示すものである。言う迄もなく芸術は、真理をば感動的に伝えるものでなくてはならない。文学書は思想の書ではない。ここに描かれる六蔵少年の姿は感動的にわれわれに迫る。それは天使の姿である。

——空の色、日の光、古い城跡、そして少年、まるで画です。少年は天使です。此時私の眼には六蔵が白痴とは如何しても見えませんでした。

「少年は天使なり」これがこの作品の主題である。「欺かざるの記」

に描かれた豊後佐伯町で出会った白痴の少年を見た独歩が激しく心を動かした事が動機となり「此少年の事を思うて、人間と鳥獣の差別、生物と宇宙の関係など、随分城山の上で空想に耽つたり」（予が作品と事実）と云った風なところを経て、七、八年も後に見出されたものがこのテーマである。「少年は天使なり」のテーマこそ六蔵少年の生涯を有意義たらしめるものであり、この作品の救いであり、作者独歩にこの「春の鳥」を纏め上げさせたものである。

——白痴と天使、何といふ哀れな対照でしやう。しかし私は此時、白痴ながらも少年はやはり自然の児であるかと、つくづく感じました。

「自然の児」というのは勿論「神の児」のことである。前述の引用文中「何者か優しい声で歌ふ」とあるこの「優しい声」とは「イエスの声」神の声という意味のように私には思える。独歩は豊後の自然を、ワーズ・ワースの眼で見、あじわったという。神の造り給いし自然の中に、そしてその自然に溶け込んでいる少年の中に「神」を見る事は容易であらう。

それから、独歩の素養は「漢文」にはじまるものであるから、文章に熱が這入って来れば漢文調になり勝ちである。「寂々として満山声なし」などはまるで漢詩の一節である。それから、独歩は自然をこよなく愛し、自然を描写することは人物描写以上に心をつかったといふ。彼に作品「武蔵野」のある所以であるが、「空の色、日の光」とは又、単語、名詞の羅列であって驚かされる。簡潔の極というべきか。「古い城跡、そして少年」とつづけて「まるで画です」といふの

は、この暖国九州の抜けるような紺碧の空、輝やく太陽の光、古色蒼然たる城跡、そして少年、これらは相寄って一つの見事な美の世界を構成するという意味であろう。そして美の国は即ち「神の国」である。神の国の少年、「それは天使です」と文章は素直につづくのである。白痴の少年六蔵のこの姿を、天使の姿として読者に印象づけ、生々と訴えて来させるものが作者独歩の文学者としての技量であらねばならぬ。

この章の終りのところで、六蔵の妙な癖のことが述べられる。それは、六蔵は大変な鳥好きで鳥さえ見れば眼の色を変えて騒ぐのであるが何を見ても鳥と云い、いくら教えても憶えないという。そして

——鳥の飛立ってゆく後を茫然と見送る様は、頗る妙で、この児童には空を自由に飛ぶ小鳥が余程不思議らしく思はれました。

で、この章は終る。身の不自由なる者ほど自由に憧れるものはあるまい。不具者六蔵が自由そのものの姿「鳥」を見て口をあぐりと開けている様はまことに意味深いと云わねばならない。

#### 第四章

「予が作品と事実」の最初にこうある。

——此一篇の主人公、白痴の少年は余が豊後佐伯町に在りし時親しく接近した実在人物で此少年の身の上話は皆事実である。しかして此少年が城山で悲惨な最後を遂げた事は余の想である。

結末の少年の死だけがフィクションであるという訳で、一、二、三章が事実に基づいて書かれたのに対し、この四章が空想で書かれたというのである。それではこの章の読者に訴えるところのものが稀薄であるかどうか。その真実性はどうか。

——彼是するうち翌年の春になり、六蔵の身の上に不慮の災難が起りました。

朝から姿の見えない六蔵を心配して田口の家の方が探しまわる。そして「先生」は城山を探すがよかろうと、自身で田口の下男一人連れて、提灯の用意をして出かける。

——怪談でも話すやうですが実際私は六蔵の帰りの余り遅いと知つてからは、どうも此高い石垣の上から六蔵の墜落して死だやうに感じたのであります。そして次のようにつづける。

——余り空想だと笑はれるかも知れませんが、白状しますと、六蔵は鳥のやうに空を翔け廻る積りで石垣の角から身を躍らしたものと、私には思はれるのです。木の枝に来て、六蔵の眼の前で、枝から枝へと自在に飛で見せたら、六蔵は必定、自分も其枝に飛びつかうとしたに相違ありません。

誰が笑えるか。この「先生」の空想はまさに万人の胸を撲つ。翼も持たずに、うっかりと目の前の鳥にさそわれて枝にとびついた白痴の少年六蔵は迂濶かも知れぬ。然し何を見ても鳥といつてさわぐ六蔵が、そして「鳥」を見て口をあぐりと開けていた六蔵が、思わず枝にとびついて生命をおとしたという此の空想の美しさは無類だ。そして、白痴者に寄せた激しい同情の念がモチーフとなり「少年は天使

なり」とのテーマがこの作品を纏めあげ、今この美しい空想がそれをささえている、と私は思う。

——英国の有名な詩人の詩に「童なりけり」といふがあります。

——というのは勿論、ワーズワースの詩「There was a boy」を指す。そしてこの少年が遂に死んで静かな墓に葬られ、其霊は自然の懐に返ったというのは、神の嘉し給うところなり、神の懐、神の国に生れたという意味であるだろう。そして、何故神の御氣に召したのかと云えば、この少年が鳥獸を差別せず、心の寂しさを鼻たちに訴え、この鳥たちと魂の交流をしたという事だろう。人間も鳥獸もそして自然もこれすべて神の創り給いしものである。神の創り給いしものは、神の創り給いしままに生きて、お互に愛し合い、助け合うことこそ神の御旨に副う事ではあるまいか。ここにこの詩の主旨が存する。意味が籠められている。

——私はこの詩が嗜きで常に読んで居ましたが、六蔵の死を見て、其生涯を思ふて、其白痴を思ふ時は、この詩よりも六蔵のことは更に意味のあるやうに私は感じました。

ワーズワースのこの詩を嗜いて常に愛読していた先生が今、六蔵の死や生涯、その白痴のことを思う時、この詩よりも意味あるように感じるとはどういう事か。答えは簡単である。すべては神のみ心によるのである。知能の働きにおいてはまことに哀れなる白痴の少年ではあるが、神のみ心に於て、その罪という観点に立つて裁かれる時、この少年を嘲り、蔑んだ世の大人達を神は善しとされるであらうか。六蔵こそは神の創り給いしままに生き、白痴の生涯を送ったものである。

神の創り給いし鳥たちと自分と差別せず、愛し、憧れ、共に生きた少年である。まさに天使と呼ぶにふさわしい。更にその生涯は、知能に長けた他の人たち、神を信せず、神のみ心にそわず、驕りたかぶり、他の弱き鳥獸達に対して殺戮を恣にしている世の大人達に大なる反省を促すものではあるまいか。ここに六蔵のもつ意味の重大さがある。そして、単に鼻の少年が鳥と仲良くしたという存在であるに対して意味深きこと幾重であるか知れないのである。

独歩は作中に、ワーズワースの「童なりけり」を引いて、そのワーズワースよりの影響を隠さなかった。然も堂々と、その鼻少年よりもわが作る「六蔵」の方が人生的意味が深いと揚言する。意気まさに高しと云わねばならぬ。

——石垣の上に立つて見て居ると、春の鳥は自在に飛んで居ます。

其一は六蔵ではありませんまいか。よし六蔵でないにせよ。六蔵は其鳥とどれだけ異って居ましたらう。

「先生」の六蔵に対する挽歌、鎮魂の心緒である。「もず」を見ても「ひよどり」を見ても、単に鳥と云った六蔵の目から見ても、ここに飛ぶ鳥は単に「春の鳥」である。この作品の題名はここに由来するのではなからうか。

六蔵の新しい墓地で母親と「先生」が出会う。その目の前を、城山の森から出た一羽の鳥が翼をゆるやかに鳴きながら飛ぶ。母親は急に話を止めて、茫然と我を忘れて見送っている。

——この一羽の鳥を六蔵の母親が何と見たでしょう。の一文でこの物語は終る。何と見たのか。勿論、亡き六蔵の魂が往

く、と見たのである。或はもつと直接的に、ああ六蔵が飛んで行くことを見たのである。

前述の如く作者によれば、この白痴の少年は実在人物であり、ただ結末の城山での悲惨な最後だけがフィクションだという。ならばこの作品の一章二章三章は事実に基づいて書かれた部分であり、最後の四章が空想で書かれた部分、という事になる。では文学作品における「真実」という点に於て、この第四章が前三章に比して感銘が薄いのであるか。否である。寧ろこの四章こそが本作品の眼目であり訴求力の存分に發揮されている章ではなからうか。

作者独歩は青年教師として豊後佐伯町の地に赴き、白痴の少年六蔵に出会い、激しい同情の念に駆られ、それがモチーフとなって遂に「少年は天使なり」とのテーマを見出すに及んでこの作品は纏められた。そしてこのテーマを強調し、根本のところ成り立たせているところのものが六蔵の死であり、その死にざまに對する「先生」の空想である。愛に発するこの空想の美しさとその力強さ！ロマンティズムの強力さが遺憾なくこの作品に漲り渡っている。

## むすび

前述の如く独歩はその「予が作品と事実」に於て、白痴の少年の事を思つて詩人的な、そして人生的感慨に耽り、七、八年の後に此の一篇が出来たと述懐している。此の出来かたに私はロマンティズムの小説作法を感じる。現実を見たまま、ありのままに適確に描くという

事、そのようなリアリズム精神に徹し、そこに見出されたテーマによって纏められた作品では、これはないという事である。見たまま、ありのままに描かれた「少女」(明治・三一・七・国民之友)や「巡查」(明治三五・二・小柴舟)のような作品でない事は勿論であるが、又これは白痴の少年に對する溢れる同情の心からのモチーフに立ちつつその現実を直写するだけに満足せず、「少年は天使なり」とのテーマを掲げてこの作品を成したのである。これは又晩年の作品「窮死」(明治・四〇・六・文芸倶楽部)「竹の木戸」(明治四一・一・中央公論)などとも異質のものというべきで、実はここに見られるロマンチズムこそは独歩文学の本質である。文学史上の彼の存在は、藤村、花袋に先立って、所謂「日本自然主義文学」の先駆者的役割を演じた事になるかも知れぬが、彼の小説作法は、遂にワーズワースの「The still, sad music of humanity」(明治・二十六年二月二十三日「欺かざるの記」独歩自ら訳して、「人生の幽韻悲調」という)を文学作品に結晶させる事に終始した作家であつたと思われる。